慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヒストリカル・ナラティヴからの脱却 : Christopher Isherwood と南カリフォルニア
Sub Title	Beyond historical narratives : Christpher Isherwood and Southern California
Author	中川, 千帆(Nakagawa, Chiho)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2002
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.83, (2002. 12) ,p.77(100)- 91(86)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00830001-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヒストリカル・ナラティヴからの脱却
——Christopher Isherwood と南カリフォルニア——

中川　千帆

1　はじめに

イギリスの小説家クリストファー・イシャウッド (Christopher Isherwood; 1904-86) は，1929年，ワイマール体制末期のベルリンに移り住み，その後約10年にわたり，ヨーロッパ各地を転々としながら，*Goodbye to Berlin* (1939) などの初期の代表作を執筆している。そして第二次世界大戦が勃発する直前の1939年初頭，アメリカへ移住する。ニューヨークでの数ヶ月の仮住まいの後，ひとつにはオルダス・ハックスレー (Aldous Huxley; 1894-1963) をはじめとする平和主義者と行動を共にするため，そしてもうひとつには映画脚本の仕事をとるために，アメリカ大陸を縦断し，西海岸へとわたった。その後はカリフォルニア州，ロサンジェルスを拠点に，作家活動を続けている。

イシャウッドは，イギリス文学史において，おおむね1930年代の作家として捉えられ，アメリカ移住後の執筆活動についてはあまり注目されていない。また移住後に発表した作品が注目されることがあったとしても，それは，文学作品としてよりも，1930年代の歴史的資料としてというのが現状である。その結果例えば，1930年代に時代設定されている *Down There on a Visit* (1962) のような作品が，南カリフォルニアの作家イシャウッドによって1960年代に発表されたという事実に配慮しながら論じられることは，ほとんどない。本論文ではしたがって，1930年代のイギリス文学という枠組みからイシャウッドを解放し，その上で，彼が南カリフォルニア

で到達した新しい表現者としての境地を，ヒストリカル・ナラティヴ (historical narrative) という観点から，後期作品を中心に分析することで明らかにしたい。

2　南カリフォルニアへの移住

1930年代末に，ファシズムの台頭を逃れ，ユダヤ人を中心とした多くのヨーロッパの文化人が，ロサンジェルスへ移り住んだ。当時ロサンジェルスは，アメリカ西海岸の新興の移民都市として，爆発的な人口増加と経済成長の最中にあった。この地は，20世紀前半になっても，人口の流動率が極めて高く Carey McWilliams が用いている統計によれば，1930年当時，ロサンジェルスでは，住民5人のうち4人が移民によって占められ，アメリカの他の地域と比較しても，その割合は極めて高いものとなっている (165)。

しかし南カリフォルニアの特殊性は，移民の率が高いという事実だけに限られるものではない。同じように移民によって築かれた北カリフォルニア地方と比較したうえで，McWilliams は，北カリフォルニアの中心都市サンフランシスコが，早くから「意識的に歴史的な都市」(19) であり，記念碑や記念像，記念公園が次々と建立されたのに対し，ロサンジェルスでは，記念像ひとつ探すことさえ難しいと指摘している[1]。

第二次世界大戦前夜にヨーロッパからロサンジェルスに移住，あるいは亡命してきた文化人は，その数，一万人から一万五千人にのぼったとも言われている (Davis 92n)。しかし彼らのほとんどが，戦争が終わると，早々にヨーロッパへひきあげていった。Mike Davis は，彼らヨーロッパの文化人が，南カリフォルニアに馴染めなかったのは，その風景，あるいは空間的な特質に一因があるとして，その著書 *City of Quarts* (1990) で次のような説明をおこなっている。

> [T]heir collective melancholia was also a reaction to the landscape. With few exceptions they complained bitterly about the

absence of a European (or even Manhattan) *civitas* of public places, sophisticated crowds, historical auras and critical intellectuals. Amid so much open land there seemed to be no space that met their criteria of 'civilized urbanity.' Los Angeles, for all its fleshpots and enchantments, was experienced as a cultural antithesis to nostalgic memories of pre-fascist Berlin or Vienna. (underline added; 47)

イシャウッドは1986年にサンタモニカで死去するまで，南カリフォルニアの風景のなかにとどまった数少ないヨーロッパからの移住者のひとりだった。Davisは，移住者，亡命者のおおかたを占めた中央ヨーロッパの人々が，南カリフォルニアに，ヨーロッパの「市民化され文明化された都市」空間の欠如という，ネガティヴな空間像しか見出すことがなかったと指摘している。それでは，イシャウッドは，南カリフォルニアの風景から果たして何を読み取っていたのか。この点についての理解を深めるにあたり，彼のなかで南カリフォルニアの対極に位置したものとは一体何であったのかを考えることからはじめてみたい。

3　ヒストリカル・ナラティヴ

共産主義が文学においてひとつの潮流をなしていた1930年代のイギリスで，なぜオーデングループをはじめとする若い作家がこの思想に傾倒したのか，それにはいくつかの要因が考えられるだろう。今回注目したいのは，この共産主義思想のナラティヴとしての要素である。30年代のイギリスの若い作家を魅了したのは，共産主義思想そのものというより，共産主義思想が提供した未来へと続くひとつの物語であった。世界の歴史という長い物語は，革命とその後にやってくる共産社会でハッピーエンドを迎える，このような幻想を共産主義の主張は彼らに抱かせたのである。

Down There on a Visit の第3章 "Waldemar" には，共産主義に傾倒する女性ドロシーと，語り手クリストファーとの会話のシーンがある。共

産主義革命は起こるだろうかというクリストファーの疑問に対し，ドロシーはきっぱりと，革命は起こるとこたえる。

> Of course it is! Communism's *got* to come. Everything has to have been leading up to that. Or else history doesn't mean anything, does it? Life doesn't mean anything. We might as well never have been.... Surely you feel that too, Christopher? You must! I [Dorothy] mean —you don't see any *other* meaning in life, do you? (italics original ; 180)

ドロシーにとって，共産主義革命が起こらなければ，歴史には意味がなく，歴史に意味がないとすれば，彼女の人生にも意味がない。*Narrating the Thirties* (1996) で，John Baxendale と Christopher Pawling が，ヒストリカル・ナラティヴについて説明しているので，それを参考にしてみたい。

> Historical narratives... link our personal sense of selfhood—the here and now—with the broader collectivities and longer timescales which give it a wider meaning, allowing us to situate our own experience of change, which in the modern world might be vertiginous and alienating, as part of an ongoing story. (10)

ドロシーの先の言葉からもわかる通り，共産主義は，ドロシーにとって過去から未来へ拡張していくヒストリカル・ナラティヴそのものであった。このように，共産主義がとりわけドロシーをはじめとする当時の若者に魅力的だったのは，この思想がまさに "an ongoing story" であったことだ。共産社会という究極のゴールを掲げた現在進行形の物語の一部となることで，彼らは先の見えない世界の中の自分を確固たる存在として認識しようとしたのである。

4　Kathleen と Marple Hall

ドロシーと同じように自己の存在をヒストリカル・ナラティヴに執拗に見出そうとする人間が，イシャウッド作品の中にもうひとり存在する。*Kathleen and Frank* (1971) に登場する作家の母キャスリーン・イシャウッド (Kathleen Isherwood) である。

Kathleen and Frank は，両親の書簡や日記を引用しながら両親の結婚から自分自身の幼少期までを綴った自伝作品である。この著書の中で，南カリフォルニアとの関係において非常に興味深いのが，母キャスリーンの書き残したテキストと，父方の一族が所有する邸宅マープル・ホール (Marple Hall) についての記述だ。

Kathleen and Frank の中に描かれたキャスリーンは，ドロシーと同じ執拗さで，しかしドロシーの場合とはまた違ったヒストリカル・ナラティヴを編み出し，その中に自分の居場所を見出そうとする。19世紀後半，裕福なワイン商人の一人娘として生まれたキャスリーンは，1901年イシャウッドの父フランクと結婚し，夫の実家で新婚時代をすごす。彼女が嫁いだイシャウッド家は，チェシャで四百年近く続く古いジェントリの家系であった。新興中産階級の出身であったキャスリーンが抱いたイシャウッド家とその田舎の邸宅(マナーハウス)マープル・ホールに対する強い憧憬の念をイシャウッドは書き記している。

しかし彼女の半生は，この家の没落の時期とちょうど重なりあっていた。田舎の邸宅での生活を維持できなくなった一族は，イシャウッドの祖父の死を境に，都会へ移り住み，屋敷は空家のまま放棄される。第一次世界大戦で夫を失ったキャスリーンは，チェシャの邸宅での生活の思い出にひたって暮らすようになる。イシャウッドはこのような母親の姿勢を "the cult of the Past" (*Kathleen and Frank* 2) と呼び，嫌悪感をあらわにするが，このキャスリーンの "the cult of the Past" の源となっているのがイシャウッド家のファミリーシート，マープル・ホールである。

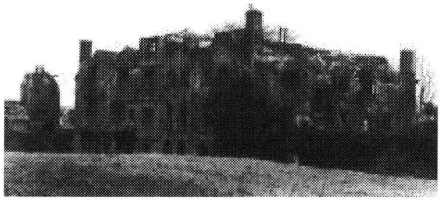
Down There on a Visit のなかに1938年の秋，イシャウッドがつけてい

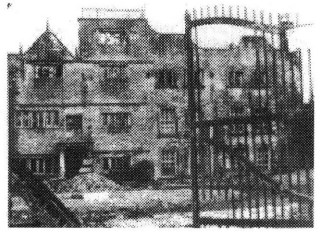
たとされる日記の一部分が載せられている。当時イギリスを訪れていたドイツ人の友人 Fisch が「ほんもののイングランド」(the "real" England) が見たいといったとき (174), イシャウッドは彼を, 荒れ果てた無人のマープル・ホールへつれていく。そのときの印象が次のように記されている。

> Oh, the squalor of the horrible, diseased old house! How can anyone dare to pretend that it's romantic? The past seemed to take me by the throat with its disgusting claw and choke me ; I shudder to feel its power, even now. In spite of all my struggling, have I ever really broken its grip? (underline added ; 174)

イシャウッドにとってマープル・ホールは老いさびれた過去の象徴だった。そして引用にあるように, その過去は, 逃れがたい力でイシャウッドを締め付けたのだ。なぜマープル・ホールが象徴する過去が, このような驚異的な力を持つにいたったのだろうか。

G. E. Mingay の説明にもある通り, ジェントリ階級が田舎に所有する通常マナーハウスとよばれる古い邸宅は,「イギリス近代社会の基盤を築いたジェントリの封建的な支配と文化の永続性を象徴するもの」(195) であった[(2)]。15世紀末にその原型が建てられ, その後, 幾度も増築を重ね, 大邸宅となったマープル・ホールは, 各時代の様々な建築様式が混在する, いわば典型的なマナー・ハウスだった。家族の歴史を刻みつけながら





解体直前の Marple Hall (1959 ; http://www.marple-uk.com/Marple.htm)

肥大化したこの屋敷は，過去から現在，そして未来へと永遠に続くヒストリカル・ナラティヴを具現化する装置となっていたのだ。先述のとおり“Waldemar”に登場するドロシーは，共産主義に自らのヒストリカル・ナラティヴを見い出したが，キャスリーンにとってのヒストリカル・ナラティヴはジェントリの家族の歴史であり，マープル・ホールは，そのようなナラティヴをより強力なものに仕立て上げるための装置とみなされた。それを証明するのが，イシャウッドが *Kathleen and Frank* のなかでたびたび引用することになる，彼女が書き残した一冊の本である。

キャスリーンは1906年から息子のために，「家族の歴史」(the history of the family; 207) と称した本の執筆をはじめている。そして彼女は，先祖の歴史，家の歴史，一家の地所やそのテナント，屋敷の中にある絵画，調度品など，細部に至るまで，その後十二年にわたって書きつづけた。

> The book contains: a history of Marple and Wyberslegh Halls, a life of John Bradshaw the Regicide, an extract from the diary of the Reverend Charles Bellairs describing Marple Hall and its occupants in 1838, a newspaper report of the coming of age festivities of Thomas Bradshaw-Isherwood in October 1841, a note on Moll of Brabyns the Marple Ghost.... What she has produced is a sort of private museum. Many of the exhibits in it are directly related to her theme, others appear to have been chosen merely because they evoke the past for her in some special way. (underline added; *Kathleen and Frank* 207)

キャスリーンは一族に関連が深い出来事や事物をその細部にいたるまで書き記すことで，ヒストリカル・ナラティヴをうみだしていった。そして，彼女のそのようなテキストは，“private museum”という言葉に文字どおりあてはまる，過去を具現化し，蓄積していくジェントリの屋敷，マープ

ル・ホールと，相互に作用しあう関係にあるのだ。

老朽化のため1959年に解体されたマープル・ホールの後を追うように，1960年キャスリーンが死去した後，イシャウッドは，キャスリーンの本をアメリカへ持ち帰り，それをもとに *Kathleen and Frank* を執筆する。そしてこのキャスリーンの「家族の歴史」の中で，キャスリーンのテキストとマープル・ホールとの相互作用の関係を明らかにする重要な例のひとつが，マープル・ホールにすむ幽霊の話である。

この家に "Moll of Brabyns" と呼ばれる，18世紀に生きたイシャウッド家の女性 Elizabeth Brabins を描いた肖像画があった。この女性は，イシャウッド家の子供の前に幽霊として現れると代々言い伝えられていた。*Kathleen and Frank* には，イシャウッドがまだ物心つかない頃，この家に滞在していたときに起きたとされる怪奇現象についてのキャスリーンによる詳細な記述がのせてある。

イシャウッドは，幼いころ，この幽霊の話を母親が非常に好んで彼に聞かせたこと，また彼自身が，成長するに従い，この話に言いようのない恐怖と嫌悪感を持つように至ったと記している。そして，幼いころマープルで幽霊ごっこをして遊んでいた時にイシャウッドが抱いた奇妙な感覚は，キャスリーンにとって，マープル・ホールというヒストリカル・ナラティヴの装置の一部分に彼自身がなっていたこととつながっていると言えるだろう。

> Once or twice, when his schoolfriends came to stay, he [Chritopher] played 'ghosts' with them.... From Christopher's point of view the curious thing was that, as long as he was playing this game, he lost all his fear of the psychic menace ; indeed, he felt that *he was part of it*. (italics original ; 231)

イシャウッドが *Kathleen and Frank* で，キャスリーンの書き残したものの中からとりわけこの幽霊の逸話を詳細に書き記しているのは興味深い。

幽霊とは，自らの死を忘れ，永続的にこの世にとどまろうとする存在であり，幽霊にまつわる物語は，過去と現在を強力に結びつける手段となる。マープル・ホールの幽霊，そして無意識のうちに自分が経験した幽霊との一体感に対しておこったイシャウッドの恐怖心は，この話を操作するヒストリカル・ナラティヴに対する，彼の嫌悪感の表れに他ならない。この幽霊は，マープル・ホールという現在に至る空間を得，そしてまたキャスリーンに語られることにより，青年イシャウッドの自我を飲み込み，拡張していくヒストリカル・ナラティヴをまさしく象徴するものとなるのだ。

5　南カリフォルニアにおける非永続性のリアリティ

カリフォルニアに移住した翌年の1940年，イシャウッドは伯父の死に伴い，マープル・ホールをはじめとする遺産を相続するが，すでにアメリカへ移住していたため，その同じ年，相続権のすべてを弟に譲渡している。そして戦後，国籍上アメリカ人としてイギリスを訪れるようになったイシャウッドは，1959年マープル・ホールが解体されるまで，たびたびこの屋敷に立ち寄ったことが日記に記されている。

老朽化の進んだイギリスの田舎の屋敷と，当時すさまじい勢いで建設がすすめられた南カリフォルニアの，真新しく，どこか異様な建造物を，イシャウッドが心の中で比較していたのは想像に難くない。1947年に発表したエッセイ "Los Angeles" の中で，イシャウッドはロサンジェルスの実に多様な外見を持つ数々の建築物についてつぎのように言及している。

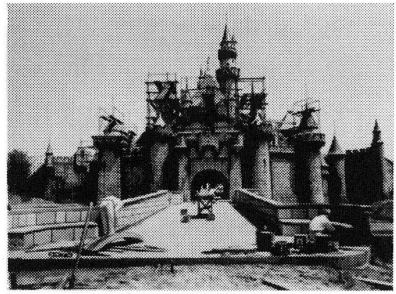
> [I]t is strongly, and now and then insanely, individualistic. Aside from all the conventional styles—Mexican, Spanish, French Chateau, English Tudor, American Colonial and Japanese—you will find some truly startling freaks : a witch's cottage with night mare gables and eaves almost touching the ground, an Egyptian temple decorated with hieroglyphics, a miniature medieval castle with cannon on the battlements.... Few of the buildings look permanent

or entirely real. It is rather as if a gang of carpenters might be expected to arrive with a truck and dismantle them next morning. (underline added ; 158)

イシャウッドにとって南カリフォルニアの風景を占める新しい建造物の対極にあたるものが，マープル・ホールに象徴されるイギリスの田舎の邸宅であった。しかしイシャウッドは，南カリフォルニアの風景に対し，多くのヨーロッパからの亡命者とは正反対の態度をとることとなった。1952年のエッセイ "The Shore" で，まるでヨーロッパの文明都市を懐かしむ亡命者の郷愁にあらがうかのように，イシャウッドは，彼自身のノスタルジアの対象が，バンガローの立ち並ぶロサンジェルスの海岸の風景にあると断言する。その上で，次のように述べている。

> What was there, on this shore, a hundred years ago? Practically nothing. And which, of all these flimsy structures, will be standing a hundred years from now? Probably not a single one. Well, I like that thought. It is bracingly realistic. In such surroundings, it is easier to remember and accept the fact that you won't be here, either. (166)

非永続的な南カリフォルニアの建築と，それと同様にこの地上に存在しなくなることが運命付けられている人間を重ね合わせることで，イシャウッドはそこに逆説的なリアリティを見出す。南カリフォルニアの建築は，「この場この瞬間の意識だけが確認しうる自我」を象徴するものであり，それは，ヒストリカル・ナラ



建設途中の Magic Castle, Disneyland (1955, Los Angeles Examiner ; http://www.usc.edu/isd/archiv)

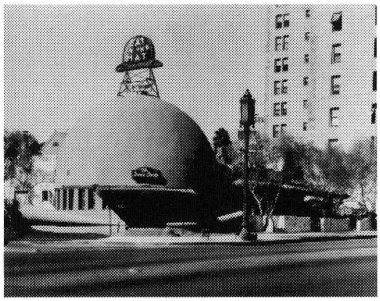
ティヴによって拡張していく自我の対極に位置するものであったのだ。彼は，このような人間の営みの非永続性を象徴する南カリフォルニアの風景のなかに，ヒストリカル・ナラティヴからの脱却，いかなる土地にも根付かないままに生きていく 'exile' としての自己の存在の全面的な肯定への道を切り開こうとしたのである。

1964年イシャウッドの最後の小説作品 *A Single Man* では，イシャウッドと同様ロサンジェルスにとどまった中年のイギリス人男性ジョージと，ニューヨーク出身でジョージと同じ大学で教える女性シンシアとのあいだで非常に興味深い会話がかわされている。メキシコ旅行の帰りにアメリカのモーテルにとまったシンシアは，アメリカのモーテルはどこにも属していない，それゆえ完全に非現実的である，とその印象を口にするが，それにたいし，ジョージは次のように答えている。

> [A]n American motel-room isn't *a* room in *an* hotel, it's *the* Room, definitely, period. There is only one ; *The Room*. And it's a symbol —an advertisement in three dimensions, if you like—for our way of life.... The Europeans hate us because we've retired to live inside our advertisements, like hermits going into caves to contemplate. We sleep in symbolic bedrooms, eat symbolic meals, are symbolically entertained—and that terrifies them, that fills them with fury and loathing because they can never understand it.... Our life is all in the mind. That's why we're completely at home with symbols like the American Motel-Room. (italics original ; underline added ; 76-77)

地理的にも文化的にも常にヨーロッパに目がむいたニューヨーク出身のシンシアは，メキシコの歴史のある古いホテルとくらべ，アメリカのモーテルはどこにも属していない（it didn't belong anywhere ; 76）と述べる。しかしそれは，すくなくともジョージには，空間的な帰属以上のことを意

味する。南カリフォルニアのモーテルは，物理的，空間的に，土地に帰属していないようにみえるというだけでなく，歴史という語りの中においても根無し草の状態にあるのだ。



Brown Derby Restaurant
(n.d., California Historical Society ; http://www.usc.edu/isd/archiv)

このようにヒストリカル・ナラティヴをうみだすことのない南カリフォルニアに定住したイシャウッドだが，作家としては，ひとつの問題に直面している。ヒストリカル・ナラティヴを拒絶するこの地で，はたしていかなる「語り」がうまれうるのか。1962年に発表された *Down There on a Visit* の第2章 "Ambrose" で，その点に関するイシャウッドの思考の断片を読み解くことができる。

"Ambrose" は，1934年夏のギリシャの小島への小旅行での経験がもとになっている。この物語の中で，語り手クリストファーは，イギリスの名家の出身でありながら，祖国を捨て，ギリシャの小島で享楽的な生活を送る青年アンブロウズのもとを訪れる。地元の人間をやとい，この島に新しい自分の家を建てようとしているアンブロウズは，ギリシャの乾いた日ざしの中で，この家にかける彼の夢をクリストファーに語り続けるが，しかし現実の家の建設は遅々として進まない。

そして物語が進むにつれ，物語の語りそのものに興味深い変化があらわれる。この島での滞在が長引くにつれて，クリストファーたちの一日の生活は，物語性を失い，毎日同じ脚本のもとくり返される一つの劇のようになっていく。そして引用された日記の最後のエントリーが示す通り，語り手クリストファーの記述は，断片化し，支離滅裂となり，語りの力をほとんど失っているのだ。

> Cigarettes gone from tent. The first time. I suppose the boys feel they know me well enough now.

＊＊＊

Sun. Island. Gramophone. Sea. World without adjectives. Except—hot, hot, hot.

＊＊＊

Saw today what this island is. Words no good.

＊＊＊

If one could only—

What *am* I doing here?

＊＊＊

Oh, Jesus, my head.

＊＊＊

Last night, perfect calm. Sitting on benzine can in moonlight, watching sea. Ambrose understands. (italics original ; 128-29)

乾いた日ざしの照りつけるギリシャの小島とアンブロウズの完成することのない家を，この作品を執筆した1950年代の南カリフォルニアにイシャウッドがむすびつけていると考えると，1930年代のギリシャの小島を舞台としたこの物語のあらたな性格が見えてくる。アンブロウズの空虚な存在は，皮肉なことにヒストリカル・ナラティヴから解放された南カリフォルニアの作家の姿であり，アンブロウズの完成しない家は，南カリフォルニアにおける語りの枯渇を意味するのではないだろうか。つまり，1934年のギリシャの小島は，南カリフォルニアにおけるイシャウッドの心象風景と言えるのである。

6　結論

ヨーロッパでの放浪生活の間，イシャウッドを意識下で束縛していたのは，マープル・ホールが象徴する空間としてのイギリスというよりも，そのような空間と共謀関係にあったヒストリカル・ナラティヴだった。以上のような認識を彼に促したのは，母国イギリスとは全く対照的な，南カリ

フォルニアの風景である。*Kathleen and Frank* の中で，家族の歴史を記す母親キャスリーンとマープル・ホールというイギリスの伝統的なジェントリの屋敷は，ともに細部を記録し，過去を蓄積することで，前者は積極的に，後者は前者の意識を通して，過去から未来へと伸張する壮大な物語を紡ぎだしていくものとして描かれている。イシャウッドは，キャスリーンのテキストの中に，母親の物語に飲み込まれていく自分自身の姿を読み取り，そのような自我の喪失に対する恐怖心が，イギリスに背を向けることになった理由であると結論づける。そして彼の 'exile' は，南カリフォルニアという歴史を刻むことのない地において，自らをヒストリカル・ナラティヴから脱却させることにより，完全なものとなったのだ。

しかしこれは作家として，新たな試行錯誤の始まりでもあった。彼を束縛したヒストリカル・ナラティヴから解放された今，新たな段階に入ったエグザイルの生活のなかで，果たして作家は物語を語り続けることができるのか。*Down There on a Visit* に登場するアンブロウズの決して完成することのない家は，文化的に不毛の地とされた南カリフォルニアにおける作家の苦悩を反映している。南カリフォルニアは，このように，イシャウッドを，新たなナラティヴを求める挑戦へとむかわせたのである。

＊本稿は日本英文学会第74回大会（於北星学園大学；2002年５月26）における発表原稿をもとに加筆修正を試みたものである。

注

（1） McWilliams はサンフランシスコとロサンジェルスというふたつの都市が与える印象の相違を次のように記している。

San Francisco is a consciously historical city, mindful of its traditions, enamored of its past; a city of parks and monuments and statues. One can look in vain for a statue in Los Angeles. (McWilliams 19)

（2） Mingay はジェントリの邸宅について次のような説明をおこなっている。

[I]n England it was not the city that dominated the countryside

but the countryside that dominated the city. It was in the mansion-houses of the gentry, not the market towns, that political decisions were taken, economic projects planned, the local community governed, and the cultural life of the age flourished. And the very permanence of the country house itself, its ancient halls studded by darkening ancestral portraits, instilled the sense of continuity and stability that was so strong an element in the squirearchy. (underline added; Mingay 195)

参考文献

Baxendale, John, and Christopher Pawling. *Narrating the Thirties : A Decade in the Making : 1930 to the Present*. Houndmills : Macmillan, 1996.

Davis, Mike. *City of Quartz : Excavating the Future in Los Angeles*. 1990. New York : Vintage, 1992.
マイク・デイヴィス著『要塞都市LA』村山敏勝・日比野啓訳　東京：青土社，2001.

Finney, Brian. *Christopher Isherwood : A Critical Biography*. New York : Oxford UP, 1979.

Isherwood, Christopher. *Diaries*. Ed. Katherine Bucknell. 1 vol. to date. London : Methuen, 1996.

---. *Down There on a Visit*. 1962. Minneapolis : U of Minnesota P, 1999.

---. *Exhumations : Stories, Articles, Verses*. 1966. London : Methuen, 1984.

---. *Kathleen and Frank*. 1971. London : Minerva, 1992.

---. "Los Angeles." 1947. *Exhumations* 156-62.

---. *Lost Years : A Memoir 1945-1951*. Ed. Kathleen Bucknell. London : Chatto, 2000.

---. "The Shore." 1952. *Exhumations* 162-66.

---. *A Single Man*. 1964. London : Vintage, 1999.

McWilliams, Carey. *Southern California : An Island on the Land*. 1946. Salt Lake City : Smith, 1999.

Mingay, G. E. *The Gentry : The Rise and Fall of a Ruling Class*. London : Longman, 1976.